

「リチャード二世」の劇的言語 その一

—— ヘンリー・ボリングブロックと

トマス・モウブレイ ——

森 泉 弘 次

序

野外劇場の幕があがると国王リチャード二世と重臣のランカスター公爵ジョン・オブ・ゴントを始めとする数名の貴族と従者とが登場する。中央の王座に、王冠をつけた美貌の白面の貴公子リチャードが着座し、その向かってすぐ右手に、霜髪の老いたるゴントが立つ。そして、舞台（といっても芝生のだが）の左はしに、きりりと引きしまった体躯と赤く日焼けした精悍な面構えのヘンリー・ボリングブロックが立って、前方（即ち右はし）をにらみつけている。まるでその燃えるような激しい眼光で相手を焼きつくしてしまうかのよう。右はしに眼を移すと、そのボリングブロックの灼熱の視線をまともに受けとめて、これもその激しさにおいては挑戦者のそれにまさるともおとらぬ冷く青い眼差の奥に吸いこんでしまうかのようにして立っているのは、ほっそりした端麗な姿態と透き通るように肌の白い貴公子のトマス・モウブレイである。ときは1982年5月なかばのある日の薄日さす昼下がり。ところはイギリス、オックスフォードのトリニティ・カレッジの、きれいに刈り込まれた芝生の美しい広大なキャンパスの一角。演じるのは同カレッジの学生を主体とする学生劇団のメンバーたち。その約6箇月前の12月上旬、わたしはストラドフォードのロイヤル・シェークスピア劇場で名優アラン・ホワードがダブル主演した「リチャード二世」「リチャード三世」を観劇していたのであったが、なぜかわ

たしには、アマチュア劇団が青い芝生のうえで上演した「リチャード二世」のほうがはるかに感銘深く、2日後再びトリニティ・カレッジに赴いて同劇を楽しんだのであった。

その頃わたしは、シェークスピア史劇とその背景にある史実との関係に興味をもち、一例として「リチャード二世」をとりあげ、その史実的背景を調べていた。悲劇や喜劇と違って、史劇はその素材としての史実とより密接な関係があるに相違ないと思ったからである。この研究の成果は、本紀要第三十五輯に〈「リチャード二世」とその史実的背景〉と題して発表した。この研究の収穫の一つは、これまでリチャードとボリングブロックとの対立の陰に隠れて、注目を受けることの少なかったトマス・モウブレイの劇的重要性に目が開かれたことであった。

いうまでもなく、史劇も劇の一種である以上、素材とのより密接な関係にもかかわらず素材、即ち史実から独立した言語作品でなければならない。本論は「リチャード二世」の劇的言語のありようを、史実的背景を参照しながら研究したものである。尚テキストはニュー・ペンギン・シェークスピア版を用いた。引用のイタリック体と下線はすべて引用者によるものである。

舞台は今から約600年前の1398年の春のある日、ロンドンにウィンザー城のホールの一室である。史実では、同年1月、¹⁾シュルーズベリで議会在開かれたとき、ノーフォーク公トマス・モウブレイの姿が見えなかった。欠席の理由は、ヘリフォード公ヘンリー・ボリングブロックが議場に現われ、彼とモウブレイとのあいだに生じた事件を説明し、彼を大逆罪で告訴するに及んで判明した。ボリングブロックによると、モウブレイがひそかに彼のもとに来て次のように述べたというのである。9年前彼らふたりも五人告発委員会のメンバーとして参加したいわゆる〈残酷議会〉事件——当時のリチャード側近の腐敗、墮落、特に国王を甚しい失政に導いた責任を糾弾して彼らを滅亡させた事件——

の科^{とが}で、彼らふたりも、告発委員会のリーダーだったアランデル伯、グロスター公、ウォーリック伯と同じ悲惨な運命にまきこまれることは必至ゆえ、協力して打開の道を講じようと提案したが、彼はそれを拒み、直ちに父親のランカスター公ゴントにこの一件を報告した。すると父親は、汝の口からちかに国王に上奏せよ、と強くすすめたので、それに従ったとのことであつた。リチャードは直ちにウスター、ブッシー、グリーンらを含む十八人告発委員会を組織させ、事件の調査と処理に当らせ、ウィンザー城内で開かれた委員会に原告のボリングブロックと被告のモウブレイ双方を召喚して、互いの言い分を聞くことにした。

さて、劇の冒頭で、リチャードはゴントに向かって次のようにいう。

Old John of Gaunt, time-honoured Lancaster,
Hast thou according to thy oath and band
Brought hither Henry Hereford, thy *bold son*,
Here to make good *the boisterous late appeal*,
Which then our leisure would not let us hear,
Against the Duke of Norfolk, Thomas Mowbray?

(由緒あるランカスター公爵、ジョン・オブ・ゴント老人よ。誓約に従って、汝の大胆不敵な息子ヘンリー・ヘリフォードを連れてこられたか。予が多忙ゆえ審理できなかったノーフォーク公トマス・モウブレイに対するかねてよりの激越なる訴えを彼に立証させたい。)

(1. 1. 1-6)

注目すべきは、作者が主人公リチャードの口からのつげに ‘bold’ ‘boisterous’ という相似た形容詞を勢いよく跳び出させることによって、公正と忠誠という大義名分のうえに立ってモウブレイの大逆罪を告発しているボリングブロックが、事件の審判者たる国王の座をも根底からゆさぶりかねぬ大胆な

(bold), すさまじい (boisterous) 行動に出ているということを効果的に暗示していることである。大逆罪で訴えられている被告のモウブレイに対してよりも、国王の安全のために訴えてはいるはずの原告のボリングブロックに対して、リチャードは脅威と憤怒を感じているかのようなのである。はっきり言ってしまうと、「予はそちの息子の告発など聞きとうない。どうして予が多忙を理由に審理を引き延ばしているあいだに、息子を説得して、その身のはどわきまえぬ不埒な訴えを取り下げさせなかったのだ」とでも言っているような激昂のトーンが内包されていることばである。ホールやホリンシェッドを通して史実を知る観客は、リチャードがボリングブロックの告発に脅威を感じる理由がありすぎるほどあるということを知っている。

エドワード三世という英国史上もっとも偉大な英傑の王を祖父に、黒太子 (Black Prince) という百年戦争で数々の武勲をたてた猛将皇太子を父にもちながら、少年時代短期間に父と祖父の両方を失って、わずか十歳のとき英国王の座につかねばならなかったリチャードは、フランスに生まれ育ち、かの国の洗練された官廷文化を骨の髄までしみこませた少年王 (a minor king) であった。初期の側近のひとりにわれらのトマス・モウブレイもいたことを記憶しよう。彼は同じく側近のひとりであった兄のジョンとともにリチャードの寵愛を受けていたが、おそらく最大の寵臣であったド・ヴェールへの嫉妬からであろう、やがて王から遠ざかり、グロスター公と並ぶ反体制派の巨頭のひとりアランデル伯に近づき、彼の娘と結婚する。

叔父のランカスター公やヨーク公のような政治経験が豊富で祖国愛、責任感の強い重臣を遠ざけ、人格的にも政治的にも未熟な、ド・ヴェール、トレジリアンらを重用して国政をないがしろにし、華美な官廷生活と側近優遇のために膨大な国費を濫費してかえりみないリチャードに対して、国中に不満の声があがるようになる。彼の叔父のひとりであるグロスター公は前記アランデル伯、ウォーリック伯、及び本劇冒頭の対決者、ボリングブロックとモウブレイらとともに1388年、王に迫って五人告発委員会を組織させ、王の側近たちを大逆罪で訴

えて全滅させた。これが史家のいう〈残酷議會〉である。しかしリチャードはこの怨みを決して忘れず、9年後の1398年、〈復讐議會〉³⁾を開いて、〈残酷議會〉後、側近にかえり咲いて異例の出世を遂げたモウブレイをも加えた八人告発委員会を組織して、グロスター、アランデル、ウォーリックの反体制三巨頭を葬った。アランデルは処刑、グロスターはモウブレイが長官を勤めるカレーの獄中で不審死を遂げた。〈残酷議會〉と〈復讐議會〉とにはさまれた約9年間、ボリングブロックのほうは、フランスに滞在して騎士道修業に明け暮れ、奪権のチャンス到来を虎視眈眈と待っていたのである。それゆえモウブレイが帰国していた彼に近づいて前記のような警告・提案をしてきたことは、彼にとって奪権への一步を踏み出すための願ってもないチャンスだったであろう。

冒頭のリチャードの問いに対して然りとこたえたゴーストに対し、リチャードは追い討ちをかけるように、

Tell me, moreover, hast thou sounded him

If he appeal the Duke *on ancient malice*,

Or.....

(そなたは、彼が旧怨によって訴え出たのか、それとも忠誠の家臣らしく何か叛逆の証拠をもとに訴え出たのか、聞きたでしたか。)

(1. 1. 8-11)

と問いかける。ゴーストは「決して宿怨によるものではない (no inveterate malice)」とこたえる。リチャードの '*on ancient malice*' もゴーストの '*no inveterate malice*' も、かつての五人委員会の同志を裏切って側近にかえり咲き、異例の出世と引き換えに彼らの破滅に手を貸したモウブレイに対するボリングブロックの旧怨ばかりではなく、残酷議會の主謀者3人と関係者多数への宿怨 (inveterate malice) を9年のちに晴らしたリチャードの執念深さをも暗示している。リチャードの命令によって謀殺されたといわれるグロスター公爵

ウッドストックは、リチャード自身にとってもボリングブロックにとっても叔父にあたる人物で、史実では生来好戦的で、私怨と公憤のいりまじった、直情径行的人物だったが、シェークスピアは、彼を主人公にした同時代の作者不詳の史劇「ウッドストック」⁴⁾に描かれたような私欲のない熱情的愛国者として示唆している。そしてボリングブロックはモウブレイに対する罪状に、グロスター殺しを、8,000 ノーブルの公金着服その他の謀叛事件とともに数えいれているのである。

二

のちに明らかにされるように、作者はボリングブロックによってかぶせられた汚名からモウブレイを完全に洗い清めたとはとうてい言えないが、しかし彼が使用又は参照したと考えられる諸材源の記述の含意と比較すると、相当程度まで彼の汚名をそそいでいると判断される。

ボリングブロックは、次の3件をモウブレイの大逆罪を構成する要件としてあげた。一つは、モウブレイが、カレー守備隊員の給料として支払うべく国庫から委託された公金を着服したこと、二つには、過去18年間に起きた謀叛事件の主謀者又は共謀者として——これはまったく信憑性を欠いたでっちあげであろう——、三つには前記のグロスター謀殺の主犯として。第一の罪状に対しモウブレイは、委託された公金の $\frac{1}{4}$ は王の承認をえて彼に対する一年前の未返済賃金に充当したが、残りの $\frac{3}{4}$ はちゃんと兵士隊に支払っていると弁明し、これを臨席の王が否認していないところをみると身の証しは立ったというべきであろう。第二については原告の誠実を疑わせるていのべらぼうな罪状であって、問題にするには足りないと思うが、作者はモウブレイに、かつてボリングブロックの父ゴーントのいのちを狙わんと待伏せしたことがあったが、その件については公爵に自白して許しを乞うて得たと弁明させている。これについても臨席のゴーントが否認していないところをみると、事実だったのであろう。〈過去18年間に起きたすべての陰謀事件〉のうち具体的にこの場であげられてい

るのは、この事件と第三にあげたグロスター謀殺だけである。

四幕二場において、奪権後のボリングブロックは、トマス・モウブレイを流刑地から呼び返して復権させ、彼と同じく他の数人の貴族たちからグロスター謀殺の主犯として訴えられているオマールと対決させ、真犯人を究明すると明言している。わたしにはオマールが主犯だとはとうてい思えないが、しかし冒頭のシーンでこの件を主要要件として含む罪状でモウブレイを告訴したボリングブロック自身が、モウブレイを謀殺犯人であると確信していなかったことだけは確実である。彼が、モウブレイの1388年の同志に対する背信には憤りを感じていたにせよ、この憤りを晴らすために確証のない罪状を彼に押しつけたとは考えられない。昔は知らず1398年という時点では、ボリングブロックにとって唯一のライヴァルは現王リチャード二世であって、そういう意味においてはモウブレイはその〈当て馬〉に過ぎない。しかし〈当て馬〉として、即ち、そのときのボリングブロックがもっとも激しく敵愾心を燃やせる仮想敵として、トマス・モウブレイに優る相手はほかにいたであろうか。そういう意味においては彼はボリングブロックにとって単なるリチャードの〈当て馬〉以上の何ものかだったのである。史実と劇的言語がそれを裏づけている。

ふたりの対話を読んでみよう。モウブレイを告発するボリングブロックのことが雄弁で、力強くて、熱情的であるのとは対照的に、罪状を否認し、原告を中傷者、叛逆者として逆告訴するモウブレイのことはどこまでも冷たく沈静している。激しい冷たさでもいいいたいトーンが彼の言語を支配している。中世心理学でいう粘液質 (phlegmatic character) の典型なのだろうか。燃えない言い訳から彼の弁明は始まっているのである。モウブレイ自身原告の真の狙いがどこに在るかを知りぬいている。彼がグロスター暗殺犯人ではないとしても彼が、カレー長官という立場上、事件の真相を知っていることはまず確実である。しかし、グロスター暗殺について真相を暴露して身の証しを立てようとすれば、国王の座を危険にさらすことは必至であるゆえ、それはできない。

Let not my cold words here accuse my zeal.

'Tis not the trial of a woman's war,
 The bitter clamour of two eager tongues,
 Can arbitrate this cause betwixt us twain.
 The blood is hot that must be cooled for this.
 ……

(わたしの冷静なことばから熱意に欠けているなどと判断しないで下さい。わたしたち二人のあいだの訴訟を裁くことができるのは、性急な二枚の舌のにがいぶつがりあい、つまり女の痴話げんかの裁判ではありません。それゆえ熱い血潮も冷やされねばならないのです。)

~~~~~  
 (1. 1. 47-51)

このあとにさらに続くモウブレイのことばは、何か無理矢理自分のことばの、あるいは情熱の熱度を高めていこうと懸命に努めているような印象を与える。力強い断言的なレトリックの力を借りて己の心を激励するのだけれど、どうしても燃えてこない。そして彼自身そのことに苛立ってさえいるようなのだ。

~~~~~  
 ……

Setting aside his high blood's royalty,
 And let him be no kinsman to my liege,
 I do defy, and I spit at him,
 Call him a slanderous coward, and a villain;

(相手が王家の気高い血筋の方だということを脇にのけ、彼が主君のお身内ではないと思えるのなら、開き直って唾でも吐きかけてやります。臆病な中傷者、悪党とも呼びます。)

~~~~~  
 (1. 1. 58-61)

モウブレイのような人は、感情が激すれば激するほど頭脳は逆に沈静してき

て燃えあがろうとする感情を再び冷却してしまうのではないだろうか。己の無実を立証するために決闘できるのならば、「氷りついたアルプスの峰へ徒歩で駆けあがらねばならないとしても (were I tied to run a foot/Even to the frozen ridges of the Alps.)」かまわぬ、と言い切るモウブレイではあっても、このイメージは余りにも冷たい。あるいは激越な冷たさに満ちている。原告のボリングブロックのほうが、裏切者 (traitor) とか悪党 (villain) とかいう口汚い罵言を鉄砲玉のように勢いよく投げつけ、証拠もあげられぬグロスター殺しの罪状を、カインとアベルの神話のメタファーまでもちだして彼を責めたて、挑発しても、モウブレイは激しく沈黙していくばかりで、公金横領と謀殺の罪状について簡潔に釈明するだけである。後者についての彼の釈明を聞こう。このきりりとひきしまった、内包力の大きい、簡潔なことば以上に、彼の無実を証し立てるものはない、といいたくなるほどにこの彼のことばは端的で暗示的でそして美しい。

For Gloucester's death,

I slew him not, but to my own disgrace

Neglected my sworn duty in that case.

(グロスター公爵の死について申し上げるなら、わたしは彼を殺してはおりません。それどころかこの一件では、わたしは誓約した義務を怠って、われとみずから恥辱を蒙ったほどです。)

(1. 1. 132-5)

仮に〈恥辱〉と訳した *disgrace* は、封建的主従関係の文脈では〈主君の不興〉という特定の意味を示すことが多いから、この短い三行の言説のなかに隠蔽されている *disgrace* の主語と *duty* の目的語とを露わにするなら——事実次の場面においてゴーストはグロスター公未亡人にそうしてみせている——次のように言い換えることができよう。

「グロスター公爵の死について釈明するなら、彼を殺したのはわたしではありません。それどころか、この一件では、主君に対する家臣としての義務を怠ったためわれとみずから主君の御不興を買ったほどです」

無論、王の面前で、モウブレイがこんなあからさまな言い方をできるわけではないけれど。

### 三

一幕二場。夫の殺人者たちへの即刻の復讐を悲痛な声で懇願するグロスター公爵夫人と、主犯者は神によって聖別された国王その人であり、彼が裁判権を掌握している以上、復讐はかなわぬ、天の裁きにまかせる以外には、と語って彼女をなだめようとつとめるランカスター公ゴントとの対話を通して、観客は問題の所在を的確に知らされる。先にも触れたが、四幕一場で、奪権に成功したボリングブロックの前で、貴族たちが、リチャードの命令を受けてグロスター謀殺をたくらんだのは誰かという問題を互いに詮議する場面があり、そこでバゴット、フィッツウォーターら四人の貴族がオマールを犯人と名指すのに対し、サリーひとりがフィッツウォーターこそ犯人でオマールは無実だと弁護する。フィッツウォーターによれば、モウブレイは、オマールが部下2名をカレーに派遣してグロスター公を暗殺させた、と語っていたという。しかしこの場面の全般的にコミカルな調子と、疑惑の焦点にされているオマールの愛すべき？ とも称したいほどの無用心さ、軽率さを考慮にいれるなら、作者は、謀殺が王命によるものである以上、家臣の誰が実際に部下を使ってグロスター公を殺したかという問題をこれ以上詮議することは無意味だといおうとしているのではないだろうか。

ボリングブロックとモウブレイ双方の激しい対決が己の身に恐ろしい危険を招き寄せかねないことを怖れたのであろう。リチャードは、彼自身、両者に劣らぬかなり激しいことばを用いて仲裁しようと試みる。

Wrath-kindled gentlemen, be ruled by me:  
 Let's purge this choler without *letting blood*.  
 This we prescribe, though no physician;  
*Deep malice makes too deep incision.*  
 Forget, forgive, conclude, and be agreed;  
 Our doctors say this is no month *to bleed*.

(怒りに燃える兩人、余の命令に従ってもらいたい。この癩癧は血を流さずに流し去ろう。医者ではないが、これが余の処方箋だ。根深い怨みはとかく患部を深く切開し過ぎるものだ。忘れよ、許せ、けりをつけ、和解せよ。今月は瀉血には向かぬ月だと医者もいうておるのだから。)

(1. 1. 152-7)

四行目の 'Deep malice makes too deep incision' ということばは興味深い。怨みの激情に呑みこまれて極端に走り、和解や回復の可能性を抹消してしまうほどの過激な悪の糾弾は避けよ、とリチャードは忠告しているのだが、9年間も残酷議會の宿怨 (deep malice) を忘れず、許せず、執念深く復讐して国を分裂の危機に導いたのはむしろリチャードのほうだと史実は語る。このリチャードのせりふのなかに瀉血 (bleeding) と切開手術 (lancing) のイメージが用いられていることに注目したい。リチャード失脚の根因は、彼が彼自身の政体の悪血を切開によって流し去ることができなかったということ、争いを恐れる余り、議論や対決の徹底を回避してきたという点に在るのではなかろうか。それは同時に、己の万能感的幻想を破壊しさる苛酷な現実——暴政に対する国民の怨嗟の声——と直面する勇気を欠いていたことと言い直してもよいだろう。

互に挑戦して譲らぬボリングブロックとモウブレイはリチャードとランカスターの手によって分けられたが、この処置に対する反応はモウブレイのほうが強かったのではないかと思う。容易に燃えぬ彼が、相変らず外に勢いよく炎を吹き出せぬままに、深く傷つけられた己の名誉をかかえて、手負いの豹のよう

にのたうち回っている。モウブレイは、リチャードの側近をつとめていた少年時代、ガーター騎士バーリーの弟子のひとりであった。それゆえ、忘恩、裏切り、謀略に明け暮れたかにみえるモウブレイのごとき中世末期の武人にも、名誉を至上とする騎士道的観念は生きていたのである。「ヘンリー四世」第一部五幕一場で例のフォールスタフが、単なることば (a word)、実体の無い空気 (air) と嘲笑した名誉の観念は、炎の玉のような正義派熱血漢ホットスパーとおおよそ対照的な性格であるモウブレイのうちにも生きていたのだ。

近世を開くのは、名誉の観念にこだわるモウブレイ型人間でもありえないし、かといって、それを逆立ちさせて生存本能と快楽原理だけで生きているフォールスタフ型人間でもありえない。近世を開くことができるのは、中世的価値観のなかで育てられ、それを人格の中枢部に吸収しながら、しかもそれとはまったく異質な近世的価値観によってそれを相対化しうるボリングブロック型人間なのではないであろうか。ともあれ、フォールスタフが聞いたら吹き出しそうなモウブレイの名誉論を聞こう。

Mine honour is my life. Both grow in me.

Take honour from me, and my life is done.

Then, dear my liege, mine honour let me try.

In that I live, and for that will I die.

(わが名誉こそわがいのち。両者は一緒に成長します。名誉をわたしからとりざれば、わたしのいのちは滅びてしまいます。それゆえ陛下、どうぞわたしに己の名誉をためさせて下さい。)

(I. 1. 182-5)

一幕三場でリチャードから永久国外追放を受けたモウブレイが、歓楽のうちに慰めを求めず、十字軍に参戦して、生命力を使い果すほど戦いぬいて死んでいったのも、贖罪の意識ばかりでなく、このバーリーゆずりの中世的名誉観の推力にもうながされた結果であることはいうまでもあるまい。

## 四

ボリングブロックとモウブレイが互いに一步も退かず、和解の提案を拒み続けるのをみて、リチャードは、6箇月後の9月17日にコヴェントリ市の試合場で決闘して黒白を決するよう命じる。6箇月という予想外に長い冷却期間をおいたのは、いずれも王座を粉碎しかねぬ爆薬をかかえたふたりの武人の衝突をできれば和解調停によって回避したかったからであろう。

先にも触れたが、次の場面に移るや、グロスター公爵夫人が登場し、義兄のランカスター公爵ゴントに、夫の死に対する即刻の復讐を懇願する。しかしゴントは、事件を裁くべき国王が下手人であるから復讐は不可能、むしろ復讐は天の審判にゆだねよう、と説く。しかし夫人はどうしても納得しない。そればかりか、ランカスターの子ボリングブロックがこの事件を含む罪状で告発しているトマス・モウブレイを下手人だと決めこんで、彼が試合場でボリングブロックによって殺されるよう呪う。ここにも宿怨 (deep malice) を忘れるどころか、それによって引き裂かれて苦悩している人間がひとりいる。しかも、多少は権力を行使しうる立場にある男と違って、これはもう自分の怨念と憤りとを剝き出しにしてみせることによってしか生きられない中世的女性の姿がある。それはひとり彼女だけではない。二幕二場において、夫君リチャードの身の上に関する名状し難い不安にさいなまれて苦しむ后イザベルもそうだし、劇の終末近く五幕二〜三場で、奪権に成功してヘンリー四世となったボリングブロックに対する謀叛が発覚して、しかもひとり息子のオマールが主謀者のひとりであることを知るや、息子の罪を王に訴え出ても忠臣ぶりをつらぬこうとする夫と半狂乱となって争い、また国王に膝まづいて息子の許しを乞うヨーク公夫人もそのひとりだ。日頃政治という男どもの世界とは縁が薄くても、家族という地上でもっとも親密なるべき人間関係のなかに政治が侵入してきて、それを破綻させるや、みずからその綻びと一体化して、全身心をもって嘆き悲しみ、訴え続けるのが彼女らだ。こういう女性たちを前にすると、権力抗争に明け暮れている男たちの卑小さがやりきれなくみえてくるからふしぎである。先

ほど引用したトマス・モウブレイの「わが名誉こそわがいのち……」という思い入れたっぷりな名せりふも、ゴーストに向かってグロスター公爵夫人が、

Finds brotherhood in thee no sharper spur?

Hath love in thy old blood no living fire?

(あの人の兄だということにもっと鋭い拍車はかからないんですか。

あなたの老いた血のなかでは愛情は生きた火のように燃えないんですか)

(1. 2. 9-10)

という激しい、リアルな情念に裏打ちされたことばの前で死人のように蒼ざめてしまう。劇後半のリチャードのせりふを除けば、ほんものの祖国愛と肉親愛とのはざまで、のびきならぬ問題の解決を天命にゆだねることによって、耐え難い状況にひたすら耐えているゴーストの激情湛えた沈痛なことばだけが、辛うじて彼女らの勤くて美しいことばに対抗しうるのではないであろうか。

Sister, farewell! I must to Coventry.

As much good stay with thee as go with me!

(妹よさようなら。わたしはコヴェントリへ行かねばなりません。

どうかお互いに無事でありますように。)

(1. 2. 56-7)

絶望せるヨーク公夫人へのこの老ゴーストの、短い、平凡な別れのあいさつのことばはどれほど多くのことを語っていることだろう、どれほど深い感情を告げていることだろう。二幕一場で瀕死のゴーストが歌った、滅びゆく祖国への悲痛な愛情と讃美とをこめたあの壮麗な白鳥の歌にまさって、わたしには上の別れのあいさつのほうが身にしみるのは何故だろうか。見事な劇の筋展開そのものがこの平凡な短いことばをかくも美しくさせているのだろうか。それともこの短いことばそのものがはらむ俳句的な沈黙の力のせいだろうか。おそら

くそのいずれでもあるまい。あえていえばその二要素の弁証法的統合が、換言すれば、この歴史劇における劇的言語としてのことばのはらむ沈黙の力のせいだろう。

ボリングブロックもモウブレイも流刑宣言を受けて祖国の土を離れねばならぬ一瞬にしか、この老ゴーストのことばに匹敵する、簡潔で濃密で美しいことばを発することができなかった。リチャードも、ボリングブロックによって王座から引きずりおろされ、王冠も笏も、位階も称号も剥ぎとられ、只のひとりの人間に立ち返ってはじめて、これに匹敵する真に悲劇的な、恐ろしいほど美しいことばを語りえたのではなかったか。

史実のゴーストは、前論で明らかにしたように、権力欲の強い、領地拡大の野望に憑かれた一面をもっていて、その点では史実上、利己的で残忍な激情家だった彼の弟のグロスターとたいして変らないが、シェークスピアは両者をいづれも正義漢と祖国愛との権化として描いた。これはいわば主題を強調するための一種の劇的理想化、抽象化のドラマトゥルギーであって、シェークスピアが生きて書いたエリザ朝時代の多くの国民の胸裡にふつふつと沸きだっていたに違いない醇乎たる愛国心と、それと結ばれた、祖国の行方についての真剣な憂慮とに呼応しうる人物造型だったわけである。

## 五

一幕二場のコヴェントリ試合場。ボリングブロックとモウブレイの決闘開始の時刻が近づいた。ふたりの決闘者は不思議な運命の共同性によって結ばれているのを感じていたであろう。そのことは、精神的にも武芸者としても優位に立っていると思われるボリングブロックが発した次のことばに現われている。

Lord Marshall, let me kiss my sovereign's hand

And bow my knee before his majesty;

For Mowbray and myself are like two men

That vow a long and weary pilgrimage.

.....

(式部官殿、膝まづいて陛下の御手に接吻することを許して頂きたい。モウブレイとわたくしとは、長い長い巡礼の旅に出ることを互いに誓いあった人間どうしのようなものですから。それがすんだら、それぞれ親しい者たちに別れのあいさつをすることを許して頂きたい。)

~~~~~ (1. 3. 46-49) ~~~~~

ここで始めてわれわれは王座を狙うマキアヴェリアン・ボリングブロックとはまったく違う相貌を帯びた彼を見出す。逆説的ではあるが、ふたりはいわばいのちをかけて相戦うことによって、一つ運命に結ばれた同志として、国王リチャードと彼のとりまきたる〈いも虫〉側近らと対峙しているわけである。9年前、リチャードの暴制に反抗して決起した反体制の同志だったにもかかわらず、その後互いに遠くへだたって敵対関係にまで立ち到ったふたりであったが、皮肉にも、数刻のちには生と死を、名誉と恥辱を截然と分かつ非情の格闘を前にした一瞬に、かつての同志愛をふたりはとりもどしたのである。

このあとボリングブロックはリチャードに向かって、“As confident as is the falcon’s fight/Against a bird do I with Mowbray fight (わたしは鷹が小鳥に襲いかかるように自信に満ちてモウブレイと戦います 1.3.61-2)”と誓う。この決然たる闘志をむきだしにして挑む原告のことばは、もしかすると、被告のモウブレイよりも国王に脅威を与えたかもしれない。

モウブレイのリチャードへの別れのことばは、ボリングブロックのそれとは極めて対照的である。

Never did captive with a freer heart
Cast off his chains of bondage and embrace
His golden uncontrolled enfranchisement

More than my dancing soul doth celebrate
 This feast of battle with mine adversary.
 Most mighty liege, and my companion peers,
 Take from my mouth the wish of happy years.
 As gentle and as jocund as to jest
 Go I to fight. Truth hath a quiet breast.

(わたしは、奴隷が束縛する鉄鎖を脱ぎ棄て、黄金の自由を抱きしめるときにもまさる解放感と躍動感とをもって、この戦いの饗宴を祝うものです。陛下並びに同僚の貴族の方々よ、どうぞお幸せでありますように。わたしは道化芝居に出るような穏やかな楽しい心境で戦います。誠実な心は平安そのものです。)

(1. 3. 88-96)

ボリングブロックが、か弱い小鳥に襲いかかる猛禽のような自信をもって、と勢いのよい、なかば威嚇的言辞をもって挑戦しているのとは対照的に、モウブレイのことは、長い歳月にわたって彼の心身をさいなんしてきた何か重圧の霊から今ようやく解放されて、自由な安息の地に赴こうとしているかのような不思議な静謐感、安堵感を漂わせている。かつての同志たちを裏切って王とともに彼らを弾圧し、異例の出世を遂げたトマス・モウブレイの後半生は、矛盾と不安に満ちた歳月だったのではないか。そして今や国家に対すを叛逆者の汚名を着せられ、決闘によって黒白を決しようとしている。勝てば晴天白日の身、万一負けてもこの世のわずらいと恥辱から逃がれることができる。

中世騎士道の所作にのっとって行なわれた試合は、開始のラッパが鳴って双方が戦い始めるや否や、国王が戦杖を投じてこれを中止させた。しばしの協議ののち、リチャードは、兩名に国家の治安を乱した叛逆者として、それぞれ10年と終身の国外追放を言い渡した。ここには、国王の一見平和愛好的にみえて実は重大な慣習法を蹂躪する恣意的命令が出現している。リチャードは6箇月⁹⁾前みずから決定した告発問題の当時としては正当な解決方法をみずからの手で

くつがえしてしまったわけである。このリチャードの不法なふるまいが臨席者一同の眼に許しがたい恣意的行為として映ったであろうことは容易に想像できる。

六、参考文献

このリチャードの恣意的な試合中止と決闘者兩人への国外追放の宣告とに対する、ボリングブロックとモウブレイの反応の差違に注目しよう。前者は次のように言う。

Your will be done. This must my comfort be:

That sun that warms you here shall shine on me,

And those his golden beams to you here lent

Shall point on me, and gild my banishment.

(おおせに従います。せめてものわたしの慰めは、この地で陛下を暖めている太陽がわたしのうえにも照り、ここで陛下に貸し出されているその黄金の陽光がわたしのうえにもさしそめて、追放の身の上を輝かしてくれることです。)

(1. 3. 144-7)

一見当りさわりのなさそうなあいさつ表現に思われるが、この作品に限らず国王が太陽のイメージで表現されるのが通例であることを考えるなら、上のポリングブロックのことは大胆不敵といってよいほど強い暗示に満ちているといわねばなるまい。モウブレイが退場したあと、父ゴーントの悲嘆に動かされたリチャードが、10年の刑期を6年に短縮したときの彼の反応はいっそう露骨である。

How long a time lies in one little word!

Four lagging winters and four wanton springs

End in a word—such is the breath of kings,

(わずか一語になんという長い歳月がこめられていることか！ 4

年のぐつつく冬と奔放な春がたったの一語で終ってしまうとは。

王の吐くことばはそれほど偉大なのだ。)

(1. 3. 213-5)

何んという卒直な王冠の偉力への羨望であろう。しかし若い、野望に満ちたボリングブロックは、このあと父の老ゴーストが明確に指摘した王権の不可避な致命的限界——王は家臣の余生を苛酷な裁きによって短縮することはできても明日の一日を貸与することはできないということ——を意識してはいない。

モウブレイのほうはリチャードの口から発せられた 'never to return' という永久追放刑を聞いたとき、おそらくその蒼白な顔をいっそう蒼白にさせて、こうこたえた。

A heavy sentence, my most sovereign liege,

And all unlooked-for from your highness' mouth.

A dearer merit, not so deep a maim

As to be cast forth in the common air

Have I deserved at your highness' hands.

(陛下、これほど重い宣告をそのお口からうかがおうとは考えてもいませんでした。陛下からは追放という深傷を頂くどころか、もっとはるかにありがたい恩賞を頂けても当然だと思っております。)

(1. 3. 154-8)

1388年の告発委員会の長老同志たちを裏切ってまで、彼らに対する王の残酷な復讐の手先となって協力してきたにもかかわらず、どたんばで大逆罪の汚名

を蒙ったまま終身追放刑に処せられねばならぬとは。思えばトマス・モウブレイの生涯は、権力への密着と並行した叛逆の生涯だった。少年時代リチャードの寵臣のひとりだったにもかかわらず、王のド・ヴェールへの独占的寵愛に憤って、反体制の巨頭アランデル伯のもとに走り、1388年残酷議会で五人告発委員会のひとりとなって王と対決する。ガーター騎士バーリの死刑宣告に対しては、現在の敵ボリングブロックとともに長老告発委員に逆らってまで彼の救命に奔走する。クーデター成功後は、体制側の国王の側近にかえり咲いて重用され、国王の仕組んだ復讐議会では八人告発委員会のひとりとしてかつての同志を糾弾する。しかし国王が敕命したグロスター謀殺に対しては王の不興を買ってまで、処刑をできるだけ引きのばして彼の延命を計る。しかし彼の変転きわまりない生涯をつらぬいているものは何んであろう。それは少年時代宮廷でつちかわれたリチャードその人への愛ではなかったろうか。ド・ヴェールへの嫉妬も、共通の師バーリの救命のための活動も、ひょっとしてリチャードから敕命されたグロスター殺しに対する不思議なためらいも、すべて深いところでリチャードへの愛と結ばれているのではなかろうか。グロスター殺しに関していえば、それがリチャード自身を破滅に導く一つの重要なきっかけになるのだから。ゴースト暗殺失敗又は中途断念とグロスター謀殺延引とのあいだにも不思議な暗合が感じられる。そして前者に対する深い懺悔と、国外追放後の十字軍参戦とのあいだにも。

最後の頼みの綱であるリチャードからも見放されて、孤立無援の身を試合場の外へ、そして異境の涯へ運ばねばならぬトマス・モウブレイ。人間的交わりの最後の一線が断ち切られてしまったという絶望的意識が彼の心の全幅を占めたとしても不思議ではない。事実、そのあと続く彼のことは、外国に追放されたらもはや母国語は使えなくなる、啞どうぜんに成りさがる、という趣旨のものであった。

Within my mouth you have engaoled my tongue,
Doubly portcullised with my teeth and lips,

And dull unfeeling barren ignorance
Is made my gaoler to attend on me.

(陛下はわたしの舌を歯と唇の二重のとびらのついた口のなかに閉じこめてしまわれました。そして鈍い、感情を欠いた、不毛の無知をわたしの牢番としておつけになりました。)

(1. 3. 166-9)

ボリングブロックと彼の近親者や友人たちとの別れの場合が親密で哀切な雰囲気包まれていたのに対して、モウブレイの別れの場合は無惨なまでに孤独である。彼に優しいことばをかけてやる者はひとりもない。家族も彼に別れをつけるために舞台に登場することを作者によって拒まれている。リチャードへの永訣のあいさつも、相手から何んの反応も引き出せず、空しく発語者の孤身にかえってくるばかりである。

But what thou (=Bolingbroke) art, God, thou, and I do know,
And all too soon, I fear, the king shall rue.
Farewell, my liege. Now no way can I stray;
Save back to England, all the world's my way.

((ボリングブロックに向かって) しかしおまえの正体は神とおまえとこのおれがよく知っている。王はすぐ後悔なさるだろう。陛下、ごきげんよろしゅう。もうどこへ行こうと自由だ。イギリスへの帰路は別にして、世界中どこでもいけるのだ。)

(1. 3. 204-207)

しかし、先述したように、モウブレイが選んだ旅路は聖地エルサレムへの道であった。四幕二場でカーライル僧上の口を通して、観客は、モウブレイが十字軍の一員として異教徒と戦った末に、疲労困憊の身を養うべく赴いたヴェニスで客死してしまったことを知らされるのである。中世末期英国の、激しい権

力抗争にあけくれる、忠誠と謀叛の渦まく宮廷世界を生きぬいた果てに、永久追放刑という苛酷な絶望的運命を、愛するリチャード二世によって課されたとき、彼は何か重要なことを悟ったのではないであろうか。

トマス・モウブレイは、謀略を好むオポチュニストにみえて、実は政治権力の実相について余りにも無知 (innocent) な武人だったのではないだろうか。一度は裏切ったリチャードに、帰参を許されてから、ひたすら彼に仕え、彼の命令をあと限り忠実に実行することによって、叛逆罪を、裏切りを容易に忘却してもらえるものと無邪気に信じこんでいた一面があったのではないか。このリチャードへの無邪気な信頼に安易に己の身をゆだねて、同志討ち的に復讐を遂げようとするリチャードのサディスティックな底意を直視することを避けてきたのではなかったか。かかる類いの無知、無邪気 (innocence) は、眼前に歴々と顕われている現実¹⁰に眼をつぶり、己の行為の結果に対して、主体的に責任をとろうとはしない、もっとも安直な処世法の一つである。試合場から立ち去る一瞬、トマス・モウブレイはみずから耽溺してきたかかる類いの、いわば〈迷える羊 (stray sheep)〉のもつ innocence の欺瞞性を看破したのではなかったろうか。キリストは、鳩の如くおとなしくあれ、とだけ言ったのではなかった。同時に、蛇のごとくさとかれ、と言ったのである。〈知らなかったから〉という言い訳をキリストは許さなかったのだ。¹⁰ 'Now no way can I stray' という先ほど引用したモウブレイのことばの一節は、「今後わたしはどう生きようと、迷える羊 (stray sheep) の無知、無邪気を言い訳にすることは許されないのだ」と読み換えることも許されるとわたしは思う。イギリスへの帰路を絶たれたモウブレイのとった道が聖地エルサレムであったということは、わたしのやや強引な推測を裏づけてくれているような気がするのだが、どうだろうか。

七

息子ボリングブロックとの事実上の永訣に際してゴーストがはなむけた忠

告は、想像的観点変更による不幸な境遇の受けとり直してあったが、ボリングブロックはこれを拒んで、不幸な境遇を不幸な境遇としてためらわず直視する道を選ぶと言い切る。これを一般に評家は、リチャードの豊かな想像性又は想像性への耽溺傾向と鋭い対照をなすボリングブロックの現実的、ストイックの性格、態度の一表示と解しているようであるが、しかし後者の言語を注意深く読むと、われわれは、彼の態度を想像への耽溺の拒否と解することはできても、想像力の貧困に帰することはできない。実例をみよう。スペースの制約の関係で原文は省略させて頂きたい。

「王がおまえを追放したのではなく、おまえが王を追放したのだと思いなさい。……さえずる小鳥を楽師とし、踏みしだく雑草を蘭草敷く調見の間とし、花々を麗人とし、おまえの進む一步一步を楽しい舞踏だと想像しなさい。」

(1. 3. 279-291)

ゴーストの上の忠言に対するボリングブロックの応答は次の通りである。

「凍てつくコーカサスを思うことによって、火を手でにぎることが出来ますか。御馳走を想像しただけで、鋭い飢えのきつ先を鈍らせますか。炎暑の夏を空想して、十二月の雪のなかで裸でころげ回ることが出来ますか。そんなことできやしません。……恐ろしい悲しみの虫歯は、その痛いところをちかに切開されるならまだしも、ものを噛むときがもっとも痛むものなのです。」

(1. 3. 294-303)

上の父子のやりとりは、子のボリングブロックが決して想像力の貧困な人間ではないことを、端的に露呈している。灼熱の日に凍てつくコーカスを、鋭い飢えのなかで山海の珍味を、真冬の雪のなかで真夏の炎暑をありありと想像す

ることができながら、しかもそう想像することによって苛酷な現実がいささかも変えられはしないということを明確に意識しているということ、これこそ真の想像力の実存を証しするものではなからうか。現実の否認としての想像ではなく、現実の彼方にある、現実とはまったく異なる、現実の対極にある、にもかかわらず、現実がやがてその必然の論理によってやがて辿りつくであろう未来を幻視し、そうすることによって苛酷な現実を苛酷な現実そのものとして相対化しつつ直視しうる想像力。それゆえに、現実逆天にこれを受け入れ、しかもそれに敗れずにもちこたえ、時節到来を忍耐強く待ち続け、時節到来するや機敏かつ果敢に決起して組織し行動しうるボリングブロックの革命家的素質は、彼がそれに耽溺することを拒否している想像とのたわむれ (1. 3. 294-303) それ自体に歴々と顯われているのではなからうか。

ボリングブロックが拒否したのは想像力そのものでは決してなくて、「窮境に陥ったら窮境こそ最上の環境と思え」という観点変更による自己欺瞞的、実利的処世訓である。かかる類いの観点変更によって確かに人は一時的には精神的に気楽になりうるであろうが、それが成功すればするほど、そのあとに来るのは麻薬からの覚醒時にも似たやり切れぬ一層みじめな敗北感・幻滅感であろう。そういう恐ろしい覚醒時の幻滅感を本能的に避けようとして人はますます麻薬的幻想力にすがり、窮境を窮境として明確に知覚する能力を弱めていくであろう。現実の対極にあるものを現実と同一視するところに革命的行動の可能性はない。現実と非現実とのあいだの距離をどこまでも見失わないこと、しかも現実とはそれがどんなに悲惨で苛酷な矛盾に満ちていようと、それ自体のなかに自己変革性をはらんでいるということ、そして現実とは単なる対象の所与ではなく、そこに生きて活動している人々の——彼らの一員としての彼自身の——実存とその働きとを既に含んでいるということ、真の革命家はほとんど無意識裡にそのことを覚知しているであろう。

Then, England's ground farewell! Sweet soil, adieu,
My mother and my nurse that bears me yet!

Where're I wander, boast of this I can :

Though banished, yet a trueborn Englishman !

(ではイギリスの大地よさようなら！ わたしを今も支えていてくれる土地よ、わが母よ、乳母よ、さらば！ いずこを漂泊しようとも、この一事をわたしは誇ることができる。即ち、追放の身であつても生粋のイギリス人であることに変わりはないと。)

(1. 3. 306-309)

ここにボリングブロックの柔軟な思考力の核心がある。たとえ外国に追放されて母国語を話すことができなくなつても、それならば、自分が滞在するその国のことばを覚え、それを使ってイギリス人たる己の思想と感情と意志を悪びれずに表現してみよう。異国人のなかにあつてかたくなにイギリス人としての己のアイデンティティを固守しようとするのではなく、たとえ拙くとも彼らのことばで己の心を伝達し、たとえ鈍くとも己の耳で彼らの言うことを聴いてみよう。イギリス的アイデンティティなるものがあるとすれば、そこにこそその自然な発露があるはずだ。母国語が使えぬことと彼の国民的アイデンティティの喪失とを短絡させたトマス・モウブレイ。終身国外追放を「故国への帰路を除いて世界中どこへも行くことができる」と強弁したモウブレイは、まだ、さきほど私が批判した誤れる観点変更法に頼り、現実直視を避けている。現実の対極に在るかに見えながら現実自体のなかにその潜在可能性の核がはらまれている革新的未来を現実そのものをつらぬいて透視しうる想像力。ノーサンバーランドのいわゆる「死神のうつろな眼からのぞいている生命」¹¹⁾(2. 1. 270-271)を透視しうる洞察力。モウブレイに欠け、ボリングブロックに豊かに恵まれてゐるもの、両者を決定的に分かつのはこの一点であらう。

(続く)

注

- 1) 本紀要第三十五輯所収拙論〈「リチャード二世」とその史実的背景〉, pp., 39-40. 以下拙論と略す。
- 2) 拙論 pp., 25-35.
- 3) 歴史家がこういうタームを用いているわけではないが, 1388 年の〈残酷議會〉との対比のために仮にわたしが 1398 年の議會をそう定義してみたのである。
- 4) 拙論 p. 31.
- 5) Geoffrey Bullough (as editor): *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare* (Routledge, 1966) pp., 460-491 にその摘要が載っている。
- 6) Cf. *New Penguin Shakespeare Richard II*, Introduction by Stanley Wells p. 33.
- 7) 拙論 pp., 33-35.
- 8) J. D. Wilson は, 作者はボリングブロックを最初から王位を狙う人間として描いてはいない, 彼は運命に操られて, 心ならずも王位篡奪者の道を歩まされたのだ, という趣旨の意見を述べているが, 私は同意しがたい。コルリッジの幅広い読みにむしろ私は共感する。Cf. *The New Shakespeare Richard II* (Cambridge Univ. Press, 1971). Introduction by J. D. Wilson.
- 9) Cf. Michael Manheim: *The Weak King Dilemma in the Shakespearean History Play*. p. 56.
- 10) マタイ伝 10 章 16 節。
Cf. Rollo May: *Power and Innocence* (Dell Book, 1972) 第十章 Innocence and Murder.
著者はいわゆる無邪気 (innocence) を真正 (genuine) なそれと似非 (pseudo) なそれとに二分し, 後者の欺瞞性, 破壊性を徹底的にえぐり出している。
- 11) 二幕一場で, イギリスの重鎮ゴートが死に, リチャードがヨークの忠告をしりぞけてボリングブロックの受くべき遺産の没収を決定した絶望的状况のなかで語られたことば。

Even through the hollow eyes of death I spy peering;